

長崎における聖地ツーリズムに関する研究

地域マネジメント専攻 1411D03 池田 拓朗

指導教員 木村 勝彦教授

1. 研究の背景

本論文の背景は、近代以降別々の現象として語られていた観光と巡礼がさまざまな場所で結びつき、「宗教と観光の融合」とも言うべき状況が生じている。すなわち、宗教的な聖地や施設の観光資源化が活発になってきており、聖地は信者が好むと好まざるとに関わらず、多様な目的を持った人々が訪れる場となっているのである。

従来観光とは物見遊山、つまり通俗的なものであると捉えられてきたため、聖なる場所である宗教的聖地を観光化することは、「聖地としての聖性の喪失」あるいは「宗教の墮落」をもたらし、地域の宗教的文化や伝統文化を破壊・変質させてしまうというようにネガティブに捉えられることが多かった。しかしながら、近年では宗教ツーリズムとして捉えられるようなツーリズムの動向が顕著になっており、パワースポットブームをはじめとして聖地への人気は一層高まりつつある。さらに信仰とは別の世界遺産登録という観点から聖地の唯一無二性が議論されるようになったこともまた、宗教と観光の融合を促進する要因として作用していると考えられる。世界遺産というワールドスタンダードな価値が付与されることによって、その場所に普遍的価値が与えられるとともに、各種メディアに取り上げられ、広く広報されていくなかで、聖地は観光客の目的地として選択されるようになってきている。このような宗教と観光が融合していく現象のなかで宗教的聖地を訪れる人が増加し、交流人口の増加や経済波及効果の創出などで一定の効果もあるものの、多くの人々の来訪によって聖地としてのあり方に変容を強いられる場合も見られる。つまり、本来「祈りの場」である宗教的聖地が観光資源として商品化され、観光との関係を問われざるを得ない状況にある。観光資源化や世界遺産化の動向のなかで観光地としての性格をもつようになった聖地は、いかに観光と向き合うかが問われているのである。

もともと宗教的聖地は、文化財や観光資源となることを企図されるものではない。しかしながら、文化財や世界遺産に登録されることによって個々の宗教的聖地に芸術的・審美的・経済的・文化的価値などの新たな価値が付与される一方で、文化財という資産価値が、あたかもその聖地や信仰そのものの「価値付け（格付け）」と見なされるという事態も存在する。したがって、宗教的聖地をいかに観光振興・まちづくりに利用するかという宗教的、文化的ポリティクスもまた問われているのである。さらに宗教的聖地に多くの観光客が来訪するようになると、宗教的聖地を訪れる際に当然払われるべき倫理的配慮を欠いた問題行動が見られるようになり、聖地そのものやそこを拠りどころとする人々の生活に大きな障害を与えてしまうという事態も生じている。

2. 研究の目的

本論文では、長崎の聖地ツーリズムを事例として、宗教的聖地を目的地とするツー

リズムの動向を検証し、聖地ツーリズムが成り立つ要因と地域マネジメントにおける聖地管理の方策と課題とについて明らかにすることを目的する。

研究の背景を踏まえて本論文では、聖地ツーリズムの動向を検証するための研究対象地域として長崎県を設定した。長崎県には 138 のカトリック教会が集中し、日本のキリスト教史の主要な舞台として歩んできた歴史が存在する。各々の教会が、現在も「生きた教会」としてコミュニティの生活基盤の中心に位置づけられており、そのような場所は他に存在しない点から見ても、特殊な場所であると位置づけられる。長崎県は観光立県を掲げており、そのなかで長崎のカトリック教会は独自の観光活用がなされてきた。古くから長崎観光の定番とされていた大浦天主堂だけでなく、個々に点在していた 138 の教会が「教会群」として新たに認知されるようになり、現在長崎を代表する観光対象となっている現状は、他の地域には見られない。そのようななかで、長崎のカトリック教会や関連史跡を世界遺産にしようとする動きが活発になってきたのである。日本には 2016（平成 28）年 11 月現在 20 の世界遺産が存在しており、「法隆寺地域の仏教建造物」や「紀伊山地の霊場と参詣道」などの宗教的聖地も存在しているが、そのなかにキリスト教関係の世界遺産はなく、そこにも唯一無二性を見出すことができる。さらに長崎の教会群の世界遺産化は同時進行で観光資源化の動きを伴っており、長崎の教会群の構成資産を抱える地域では、長崎県の施策の動向が地域の今後のあり方に大きな影響を与えるものとなっている。さらに長崎の教会群が ICOMOS の指摘で 2016（平成 28）年 2 月に世界遺産推薦を一時取り下げることとなり、その際に指摘された「将来的な来訪者管理」の課題は、まさに地域マネジメントの問題と考えられ、本論文における研究課題と通じるものである。

そして、長崎寺町の存在もまた、長崎県を研究対象地域として設定した重要な要素である。江戸時代にキリシタン禁制の意図をもって作られた長崎寺町は、2 社 14 寺がほぼ横一列に立ち並ぶという独特の景観美を有している。また日本古来の伝統的寺院と中国にゆかりのある黄檗宗寺院が混在する寺町の街並みは、全国的に見ても他に類例のない唯一無二の景観といえるだろう。そして長崎寺町もまた、長崎市の人々の生活と切り離すことのできない宗教的聖地である。「精霊流し」や「長崎くんち」といった地域に根づいた伝統行事は、長崎の人とまちに関わる宗教行事として、まさに長崎の人々の「生活のなかの宗教」と呼べるものであった。これらの行事に寺町の寺社は大きな関わりと役割を果たし、寺院は檀家を、神社は氏子を抱えるため、地域色が強く、地域に根づいているのである。このように長崎寺町の 2 社 14 寺も「生きた寺院」として地域のコミュニティに根ざしており、生活のなかに宗教が関係している点においては長崎の教会群の比較検討の事例として妥当であり、独自性があると考えられる。

3. 研究の方法

本論文では J.アーリのまなざし論を援用していくが、その際ゲストを一括して理解するのではなく、観光客、巡礼者、聖地ツーリズムの参加者という三者に区分して、従来の「聖なる」宗教的聖地、「俗なる」観光地という境界が融解し、観光客のなかにも巡礼の要素が、逆に巡礼者のなかにも観光の要素が生れるようになったことを論じ

る。それとともに、聖地ツーリズムという現象は従来の観光にはない特殊な形態であることを明らかにし、それがどのような特徴を有するものであるのかを考察していくところに本論文の主眼がある。

したがって本論文では観光客への聞き取り調査を実施し、聖地を訪れる人々の動機と目的を明らかにしていく。さらに観光客を迎え入れる地域社会の人々が、多くの観光客の来訪をどのように捉え、どのように対応しようとしているのかを考察する。具体的には、「人々の語り（ナラティブ）」に注目して、ホストとゲストの両者への聞き取り調査を実施する。ホストの側では、観光対象となる聖地がそこに住む人々の祈りの空間であり生活の場でもあるため、聖地のあり方に関する了解は自らの生活基盤である地域社会の方向性に直結してくることを明らかにする。一方でゲストの側では、さまざまな観光地のなかから敢えて宗教的聖地を選択する観光客は聖地に何を求め、その場所をどのように理解しているのかを明らかにする。それによって聖地を訪れる観光客の現代的ニーズに応答しながら、聖地がその場所の聖性をいかに保ちつつツーリズムと応答していくのかを考察していく。

そのために本論文では、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産が存在する長崎市の市街地と外海地方、平戸市、五島列島で聞き取り調査を実施する。さらに聖地をキリスト教聖地に限定せず、仏教寺院の観光資源化についても検討を行うため、江戸時代にキリスト教禁教対策の一環として成立した長崎寺町の事例を取り上げる。長崎のカトリック教会及び長崎寺町というこれら 2 つの宗教的聖地の事例を検討し、現地調査から得られた知見にもとづいて宗教的聖地をめぐる商品化の倫理的問題を明らかにしていきたい。観光客の多様化によって異文化が接触するコンタクト・ゾーンとしての一面を有するようになっている聖地において、ホスト社会における観光資源化の実態と、観光客が聖地に求めるものは何であり、聖地において人々のまなざしはどのように交錯していくのかを検討するなかで、聖地ツーリズムの課題と今後の展望を地域マネジメントの観点から論じていく。

4. 研究の結果

本論文は 4 部から構成されている。第 I 部では理論的考察を行い、本論文における研究の視点及び観光の基本構造を概観し、聖地に対するまなざしの変容していることを論じた。熱心な信仰者が行う宗教実践のイメージが強く宗教的特徴を色濃く残しているとされていた巡礼は、現在「聖地ツーリズム」とも言うべき現象となっており、聖地にツーリズムの要素が介入することによって起こり得る倫理的問題を明らかにした。また聖地の遺産化が聖地にもたらす影響を検討し、特に世界遺産化の動向に注目して世界遺産の基準や価値を整理していくなかで、そのブランド力がどのようなものであるかを検討した。このような視点を踏まえて、聖地ツーリズムという現象の意味を考察した。宗教的聖地を目的地とするツーリズムの動向に関しては、現在長崎の教会群で顕著に見られており、聖地のもつ聖性や世界に認められた普遍的価値を表す世界遺産という徴表によって多くの人々が来訪するようになっている。しかし、訪問する人々が増加したことによって宗教的聖地としての聖性が喪失されたり、聖地のあり

方に変容を強いられる場合も出てきており、聖地管理の重要性と方法が問われるようになってきたことを明らかにした。

第Ⅱ部では、研究対象地域である長崎県のカトリック聖地を事例として、聖地ツーリズムの現状を明らかにした。そのためにまず長崎におけるキリスト教史を概観し、現在に至るまで長崎においてキリスト教がどのような位置を占めてきたのかを論じた。また長崎の教会群の世界遺産運動が起こってきた経緯を整理し、価値の根拠やその物語性を記述するとともに、世界遺産化に対するカトリック・行政それぞれの立場を検討した。そして大浦天主堂、田平天主堂、出津教会、頭ヶ島天主堂・旧五輪教会堂の事例から、地域社会における教会の世界遺産化・観光資源化の現状を考察した。大浦天主堂の事例では、信仰の場でありながら、「国宝」という公共の遺産として「開かれた場」の側面をもつ大浦天主堂の特殊性から、文化遺産の保存と観光活用の問題を考える上で一つの基準となるべき重要な場所である点を指摘した。田平天主堂の事例では、世界遺産推薦の当初から有力な資産として挙げられていたこの天主堂の現状を明らかにした。田平天主堂も世界遺産の効果を受けて、聖地がマスツーリズムの波に晒される事態にあり、信者と観光客のまなざしは交錯している。増加する観光客に対して、地域社会の側では受け入れる許容範囲を越えており、世界遺産候補からの除外に安堵する一面も聞き取り調査のなかから明らかになった。田平天主堂は多様なアクターの思惑がひしめき合っており、どのように折り合いをつけながら観光化、そして聖地管理に向き合っていくかが迫られている現状を指摘した。

出津教会の事例では、キリシタン文化が観光資源化・世界遺産化されることの意味を地域住民の語りを通して検討し、聖地に向けられる人々のまなざしが交錯する現状を考察した。出津教会をめぐっては、世界遺産化の動きのなかで、かつて「ロマン主義的まなざし」が向けられていた聖地に、「集合的まなざし」が向けられるようになってきた。信者のなかでは、世界遺産登録によって教会が保存されることに多くの賛同が得られているものの、それに伴う観光資源化をめぐっては地域社会のなかで対立が起こる事態となっている。しかし、地域社会のなかでも観光客に対応するために設置された「教会守」という役職に従事しようとする信者も増加しており、観光化に向き合おうとする機運が高まりつつあった。一方で、教会守制度はそのあり方の根本から見直しが進められており、出津教会の管理だけでなく集落全体の管理が求められるようになった今、地域の過疎化・高齢化の現実もあり、ディレンマと危機感の渦中にあることを明らかにした。そして頭ヶ島天主堂・旧五輪教会堂の事例では、長崎の教会群の世界遺産化の動向のなかで並行して進められてきた観光化の問題を取り上げ、教会が観光商品となることの意味と、地域社会のそのような事態に対する反応を明らかにした。五島列島においては、「五島巡礼」という観光商品をきっかけに、点在していた教会を巡礼の形を模倣して結びつけることで、人々は教会群として捉えられるようになった教会を観光の目的地として選択するようになった。さらに現在、世界遺産候補という徴表を強調し、五島巡礼に「楽しみ」の要素を加えた新たな観光商品が誕生している。ツアーの参加者が非信者であっても、教会の静寂な聖なる空間に身を置いて安らぎや癒やしを感じたり、夕暮れの教会に集まり祈りを捧げる信者の姿に感動を覚え

る人々も多数存在し、聖地への憧憬をより強くしていることを論じた。

第Ⅲ部では、長崎寺町を事例として、仏教寺院の観光資源化について検討した。2社14寺が立ち並ぶ独特の景観が成立した過程を論じるとともに、寺社の住職・宮司などの宗教関係者や地域住民のナラティブを通して、聖地ツーリズムにおける聖地と観光の関係をカトリック聖地とは別の観点から明らかにした。寺町は寺社の観光資源化に慎重な姿勢を示しており、寺町を舞台としたイベントには協力的な態度を表すものの、観光化に積極的な寺社は興福寺・崇福寺といった黄檗宗寺院のみで、長崎のカトリック教会とは異なり「群」としてのまとまりは、寺町においてはほとんど見られていない。とは言え、寺町の寺社を活用した観光まちづくりにおいては、寺社・住民・行政の三者の協力なしには実現は不可能であり、その点に関して長崎の教会群の聖地管理の課題との共通性を見出した。

第Ⅳ部では、本論文のなかで考察してきた理論や事例研究をもとに、聖地ツーリズムという現象を考察した。長崎の教会群や長崎寺町を舞台とした観光商品は、単に観光としての側面だけでなく祈りの要素をも持ち合わせており、観光のなかにも巡礼の要素を、逆に巡礼のなかにも観光の要素を持ち合わせているため、両者を峻別することは難しくなっている。それでは人々はなぜ聖地を目指すのであろうか。聖地は信者にとって「祈りの場」であると同時に「聖なる記憶の場所」であるが、非信者にとってさえ、ある力を持った特別な場所として受けとめられている。したがってガイドブックやメディアによって創られたイメージだけで捉えるのではなく、聖地の聖性を体感しつつ地域社会を理解していくことが求められてくると考えられる。聖地を管理していくためにはホストだけでなく、ゲストにも多くの了解が必要となってくるのである。